

病虫害発生予察特殊報 第1号

病名：ネギ類（タマネギ、ネギ、ニンニク）黒腐菌核病
病原菌：*Sclerotium cepivorum* Berkeley
作物名：たまねぎ、ねぎ、にんにく

1 発生確認経過

令和6年5月、北信地域のたまねぎ、ねぎ、にんにくの栽培ほ場において、地上部の生育が悪く、地下部（鱗茎等）の表面に白色の菌糸塊と黒色小菌核が付着する株がみられた。

県野菜花き試験場で病原菌の分離、病原性試験、遺伝子解析等を行ったところ、いずれも本県では未確認であった *Sclerotium cepivorum* Berkeley による黒腐菌核病であることが判明した。

本病は、昭和34年に栃木県のねぎで発生が報告され、昭和54年には青森県のにんにく、昭和58年には静岡県のだまねぎ、以降、全国各地で確認されている。

直近では、令和3年4月に大阪府（たまねぎ）、令和5年2月に秋田県（ねぎ）で特殊報が発表されている。

2 病徴と被害

罹病株は、下位葉が黄化して生育不良となり、根の発育が悪いため容易に抜き取れる。病勢が進むと全体が枯死する。地下部（たまねぎ、にんにくでは鱗茎部）は軟化腐敗し、白色の菌糸塊や黒色ごま粒状の小菌核（直径0.2~1.0mm）が密集して形成され、黒いかさぶた状になる。



図1 鱗茎に形成された菌糸塊と菌核（左：たまねぎ、右：にんにく）
（矢印の先の黒い小さな粒が耐久体の菌核）



図2 葉が黄化し生育不良のんにく



図3 生育停滞する発病株（ねぎ）

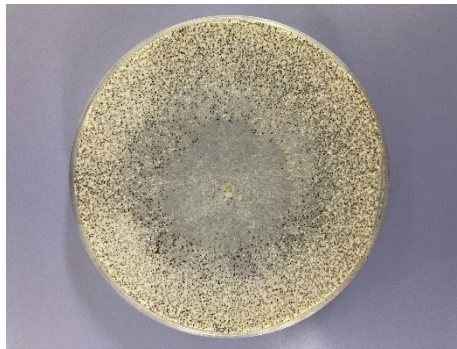


図4 PDA培地上の菌叢（黒い点が菌核）

3 発生生態

- (1) 本病の病原菌は糸状菌（かびの仲間）の一種で不完全菌類に属し、培地上では菌糸と大量の菌核を形成する。
- (2) 病原菌の生育適温は15～20℃で、15℃前後の比較的低温で発病しやすい。
- (3) 前作の罹病株に形成された菌核が土壤中にすき込まれて次作の伝染源となる。菌核は、土壤中で4～5年生存し、発病株の残渣や残渣を含んだ土壌とともに移動するので、風雨による拡散に注意が必要である。
- (4) たまねぎ、ねぎ、んにくの他、にら、ラッキョウなど広くネギ属の作物に病原性を示す。
- (5) 土壌 pH が低く（酸性土壌に）なるほど発生しやすい。

4 防除対策

- (1) 無病苗を用いる。なお、発病がみられるほ場を苗の育苗床にしない。
- (2) 発病株を見つけ次第早めに抜き取る。発病株や被害残渣をほ場にすき込まず、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- (3) 他のほ場へ病原菌を拡散させないため、作業機械等の洗浄は丁寧に行う。
- (4) 発生ほ場では連作を避け、ネギ属の作物以外を栽培する。
- (5) 酸性土壌で発生が助長されるので、石灰資材により土壌 pH を矯正する。
- (6) 薬剤防除にあたってはラベルに記載されている事項をよく読んで使用すること。

長野県病害虫防除所

TEL : 026-248-6471 (直通)

FAX : 026-248-6473

E-mail : bojo@pref.nagano.lg.jp